

エドワード・ギボンにおける文明と野蛮

芝 井 敬 司

目 次

- 一 はじめに
 - 二 一八世紀とギボンの文明認識
 - 三 一八世紀とギボンの野蛮認識
 - 四 共和政、徳、商業
 - 五 おわりに
- 註

一 はじめに

エドワード・ギボンと彼の名著『ローマ帝国衰亡史』について、今さら何かをつけ加える必要があるのだろうか。ローマ没落についての不朽の名著、マルクス・アウレリウス帝からビザンツ帝国の滅亡にいたる千三百年におよぶ歴史のバノラマ、古典の素養に裏打ちされた絢爛たる文体。こうした点から『衰亡史』は、一八世紀イギリス歴史叙述の最高傑作とうたわれ、その歴史作品としての成功と影響の大きさが、イギリスにおける歴史研究の専門化のスピードを

鈍らせ、長らく歴史叙述の文学性に対する高い評価を保たせる一因をつくったとさえいわれる。^② 日本においても、村山勇三の翻訳によって早くから広く読まれ、最近の中野好夫らによる新訳によって、ますますその普及に拍車がかかった。

『衰亡史』そのものの普及に加えて、本書の内容および著者であるギボンその人についての研究書と研究論文の質と量もまた驚くべきものになっている。一九八二年に『若きエドワード・ギボン』^③を刊行し、一九八九年になって『啓蒙の歴史家エドワード・ギボン、一七七二―一七九四年』を著わして、ギボンについての詳細な伝記的研究を完結させたアメリカのギボン研究者パトリシア・B・クラドックによれば、一八七八年のJ・コッター・モリソンの『ギボン』に始まる本格的な伝記的研究は、手稿、草稿、メモ、書簡など新しい素材の発見と刊行を経て、ますます詳細な事実に分け入り、現在にいたっている。^④ 先にあげたクラドックの近著の巻末には、主としてギボン関連の文献リストが収められているが、その数は「註にお

いて二度以上引用されたもの」という限定をつけても百を越えており、そのテーマの範囲の広がりが大きく、多岐にわたっている。

しかしこの場合は、このような多様な研究テーマのそれぞれについて紹介、検討する場ではないし、専門的な伝記的研究者の間でしか問題とならないような細かな事実を数え上げる場でもない。そこで本稿では、やや広い視野からギボンと『衰亡史』を眺めることにしよう。その際、筆者の問題意識に訴える問題点は、主として以下の二つである。第一に、一八世紀啓蒙主義の歴史観を代表するモンテスキューやヴォルテールなどのギボンの先行者、あるいはテュルゴ、コンドルセなどのギボンの同時代人にあたる啓蒙の哲学者と比較した時、ギボンと彼の『衰亡史』は彼ら哲学者の歴史研究と同一の地平にあると言えるのだろうか。同一か否かを論じる場合、その判断基準の力点は、史料批判の有無か、進歩史観か、あるいは過去に対する基本的見方か、あるいはその他の基本的歴史理解の特徴か、いずれにせよどこに求められるべきなのだろうか。この間は、同時にギボンと『衰亡史』と一九世紀の歴史主義の歴史観との同一性の有無を検討することを意味する。この点に関しては、一九五四年という早い時期に書かれたモミリアーノの「歴史の方法に対するギボンの貢献」に注目しておきたい。

さて、第二の問題点は、同じくギボンと『衰亡史』の史学史的位臚づけを意識しながらも、この問題を歴史叙述の展開の中に狭く位置づけることを課題にするのではなく、より広く一八世紀における

政治思想史あるいは社会思想史の中でどのように定位できるかを問う。そこで問題となるのは、文明と野蛮（あるいは未開ないし原始）の優劣をめぐる争われた古代派—近代派論争との関わりで、ギボンはどのような位置を占めたのかということである。一七世紀に始まりつつ二世紀はあるこの論争の諸側面、とりわけ文学上の優劣については本稿の取り上げるところではない。むしろ一八世紀にあって、文明と野蛮の問題つまり時間と空間の中のあらゆる種類の人間社会が、いかに「科学的に」あるいは整合的に理解されていたかという点に焦点が絞られる。ミークの興味深い分析によれば、諸社会の理論は、一八世紀の半ばを境として、諸社会の空間的配置から諸社会の時間的な発展段階論へと移行したという。その発展段階論はスミスにおいて狩猟、牧畜、農耕、商業の四段階が経済的富の増加と同一視されることによって、尺度としての完成を見た^⑨。ギボンと『衰亡史』は、ミークの言う四段階理論とどのような関係に立っているのだろうか。

この問題は、政治思想史から見た場合に、さらに興味深い論点を提供する。「ギボンの『ローマ帝国衰亡史』と後期啓蒙思想の世界観」において、ポーコックはギボンの『衰亡史』の叙述が、単に歴史的過去についての研究であるにとどまらず、デフォール、モンテスキュー、ヒューム、スミスといった同時代人と同じく、政体論、徳、商業などの役割と評価を基礎に組み立てられていると論じた。とりわけギボンの場合には、西ローマ帝国を滅亡に追いやったゲルマン

人についての叙述の中に、「野蛮の社会学」the sociology of barbarism^⑩ というべき特徴を見ることが出来る。

ギボンの『衰亡史』はまた、文明と野蛮の問題と関係しつつ、後期啓蒙思想の外部世界の認識の一例として検討しうる。一七八八年にギボンの自宅の書棚には六千冊から七千冊の書物が並んでいたという。彼は東洋の言語を解しなかったが、年代記と詩を中心に当時入手できる東洋関係の翻訳文献を揃えていたことは確かである。^⑪ ヨーロッパ近代のアジア世界認識の展開を「オリエンタリズム」という新しい作業概念の下に描写したサイードの著作の中では、残念ながらギボンの『衰亡史』についての言及は少ない。^⑫ しかし、ポーコックが指摘するように、ギボンの大著は決して単なる歴史研究として読まれてはならない。

さて以上のように問のリストは与えられた。第一の史学史上の評価に関わる問題点については別の機会に譲り、以下本稿では、第二の問題点を構成するいくつかの問について、ギボンにおける「文明」と「野蛮」の問題に絞って、現時点でのまとめと見通しを報告しておくことにしよう。

二 一八世紀とギボンの文明認識

一八世紀が、とりわけその前半の時期が、空間の認識に極めて多大の知的努力が傾けられた時代であったことは、この世紀に興味を寄せる研究者の共通理解となってきた。人口の停滞と経済の危

機によって特徴づけられる前世紀と比べると、一八世紀はゆっくりとしたリズムではあっても経済的拡大を経験し、それとともに、人や物や情報の往来はかつてなく活発になる。一八世紀は旅と交通の世紀であった。^⑬

このような特徴を持つ世紀の知のありようは、基本的に相対主義的色合いを持つことになる。多種多様な事実は、まず博物学的な視線で観察され分類される。そこで用いられる方法と論理は、観察、比較、分類のそれであり、多様な差異の分布する異質性を内包する空間が、一覽表にまとめ上げられた。人間や社会についての研究もまた、一八世紀においては、博物学的傾向を強める。一八世紀において、人間の研究は非ヨーロッパ世界からの豊富な情報を前にして、大きく分けて二つのアプローチをとった。一つは歴史と文献学に主眼を置く伝統的アプローチであり、もう一つは、新しい博物学的アプローチである。^⑭

伝統的アプローチは、すでに知られている権威ある典拠としての聖書とギリシア・ローマの古典に依拠しながら、非ヨーロッパ世界の間を説明し位置づけようとした。アダムに始まりノアを経て世界中に拡散していった人間を、系統樹の形に再現し位置づけることが目指された。新しい発見は、この枠組の中に何とか押し込まれた。このようなタイプの研究は一八世紀においても衰えを見せたとは言えないが、徐々に新しいアプローチに席を譲ってゆく。新しいアプローチは、当時において「人間の博物学」natural history of man

と呼ばれていた。このアプローチは、人間について、全世界から集められた観察と実験結果のもっとも包括的な集大成を得ることが目的とされた。一七四九年に出版されたビュフォンの『自然誌』では、その第二巻と第三巻が「人間誌」に当てられており、世界各地に住む諸民族の一覧表が提示されていた^⑤。また、スコットランド啓蒙思想を代表するヒューム、スミス、ファーガソン、ミラー、ケイムズなどの著作は、こうした人間の博物学と近接した所に成立していると考えられる^⑥。

人間の博物学という立場からすると、過去の不確かで信頼性の薄い断片を継ぎ合わせて人類共通の起源を探り、それによって人類の多様なありさまを説明しようとする伝統的アプローチは問題が多かった。むしろ、世界中の人類の現在の状態を学ぶことの方が、はるかに有益なのである。なぜなら、現在、われわれの眼前には、野蛮から文明にいたるあらゆる段階の民族を包含した壮大な人類の地図が存在しているのであって、たとえば初期の人類史を理解するためには、不正確な原典に時間を浪費するよりも、現在の野蛮人、未開人を調査する方が優れているからである^⑦。

こうして一八世紀後半には、世界各地の社会を、また、それぞれが達成してきた進歩の度合を、その社会の生計の種類に注目して分類する方法が生まれてくる。とりわけ、スコットランド啓蒙思想においては、ヒューム、スミス、ミラー、ロバートソン、ファーガソン、ケイムズといった人物によって、ミークの言う狩猟、牧畜、農

耕、商業の四段階理論 four stage theory が進歩の尺度として生み出された^⑧。

ここで人間の博物学は大きく展開した。多種多様な人間社会は、空間的に配置され、それぞれが独自の色合いを持っていたものと理解されていた段階から、経済の進歩という一貫した価値的視点から諸社会が一つの時間軸上に整序される段階へと移っていった。そして、そこでは文明社会が近代ヨーロッパ社会と等置、局限され、非ヨーロッパの諸社会は、原則的には時間軸上の過去へと押しやられ、貧困かつ野蛮な段階、あるいは停滞した状態へと「正当」に位置づけられることになった^⑨。ギボンの『衰亡史』が発表されたのは、このような移行が進行しつつある時代であった。それゆえ、われわれは、『衰亡史』におけるギボン自身の文明と野蛮の処理のありようを、四段階論との関わりで検討してみようと思う。

長期にわたる古代派―近代派論争をへて、この世紀の後半には、この論争は近代派の圧倒的勝利をもって終了したと言える。たとえばフランスでは、人類全体の過去の歩みを進歩のプロセスと把握する進歩史観が生じた。ダランベールの『百科全書』の「序」やコンドルセの『人間精神進歩の歴史素描』に見られる歴史認識は、明らかにこのような近代社会に対する自信に支えられていた。まさに一八世紀のフランスとイギリスを起点とする文明社会は、未来の理想的社会を目指して着実に前進しつつあった。古代ローマは、確かに人類史の中の光り輝く一時代であったが、それは近代ヨーロッパの

文明社会を凌ぐものではない。また一方、スコットランド啓蒙思想がたどりついた四段階理論に基づく社会理論では、生計の手段に応じた経済的進歩が想定されており、ここでもまた、商業と手工業の発達しつつある近代社会のみが文明の名に値する社会であった。古代ローマは、たとえばスミスの『諸国民の富』においては、まだ文明社会に到達していない農耕民の社会として例示されている^⑧。

このような世紀後半の一般的理解と比較すると、ギボンの立場は幾分か異なっていた。まず何よりもギボンは、古代ローマを一つの文明社会と捉えていたからである。古代ローマはヨーロッパの母であり、ギボンの文明の観念自体がローマから形成されたのである。

ローマとギボンの関係は、ある意味でルネサンスの人文主義者が古代に抱いた尊崇と憧憬の念を想い起こさせるほどである^⑨。ただその場合にギボンが古代派であったとは言えない。確かに二世紀のローマは、人間の歴史における最高点であり、「世界史のこの時期には、人間の状態がもっとも幸福で繁栄を極めた^⑩」とギボンは述べているが、後に述べる「西方におけるローマ帝国滅亡に関する一般的考察^⑪」の内容からもわかるように、彼は近代ヨーロッパ文明社会の優位に対する確信を隠さなかった。またルネサンス以降浸透した「生・死・再生」の循環的イメージとも、同時代のヴィーコに見られる螺旋的発展のイメージとも密接な関連性を指摘することはできない。

この問題を論じたフュレは、ギボンのローマへの賞賛の奥にある理由を詳細に結論することは難しいと限定した上で、ギボンは「古

代びいきであると同時に近代的であった^⑫」と指摘する。ギボンは啓蒙思想家が歴史の中に考察しようとした「社会に生きる人間、自然法、社会契約」といった哲学的問題について、何らかの理論化を目指しはしなかったし、ギボンの尊敬するモンテスキューが『ローマ人盛衰原因論』で示したような政体の一般類型論のケース・スタディとしてローマを考察したわけでもなかった。フュレは、こうしたギボンの姿勢の中に、ローマの偉大さをありのままの事実として、つまり歴史の法則とは無関係な、ただ描き出されなくてはならないユニークな人間の経験として描こうとする歴史家の態度を認めている。「『ローマ帝国衰亡史』を一貫して流れているのは、歴史の偉大な時代のユニークさとはかなさに対するロマン主義的感覚なのである^⑬」。

しかし、以上のようなフュレの指摘を認めるとしても、ギボンの「はかなさに対するロマン主義的感覚」は近代ヨーロッパ文明社会にまでは、及ばなかったようである。『衰亡史』第三巻の末尾に付せられた「西方におけるローマ帝国滅亡に関する一般的考察」において、ギボンは西ローマ帝国の運命と彼の生きる一八世紀のヨーロッパ社会の将来を比較している。ギボンは、西ローマ帝国衰亡の諸原因を考察した後で、それを踏まえて「現代への教訓」を導き出そうとする。ギボンは、「ヨーロッパ各国の住民が礼儀正しさと文化の点では同じ水準に達している」ということから、「ヨーロッパ全体を一つの大共和国と考えることも許されるはず^⑭」であると述べ、

各国間の力の均衡が今後も変動し続けるとしても、そういった変動も「ヨーロッパ及びその各植民地の住民を、それ以外の人類よりはるかに際立たせている学芸や法律や風習の制度を本質的に損なうことはありえない」とする。このような見通しの下に、ギボンが「文明社会の共通の敵」である地球上の野蛮な諸民族が、再びヨーロッパを脅かし、古代ローマに与えたと同じ災難をもたらす可能性があるかどうかについて、長々と検討を続ける。

まず第一に、かつてローマ帝国を滅亡に追いこんだ野蛮な民族の大移動は、彼らの間で技術や農耕の一定の進歩が生じたために、今後再び起こる可能性はない。第二にローマの衰退期を特徴づける無能な政治指導者と比べて、今日のヨーロッパは、「大小さまざまな一二の強力な王国、三つの立派な自治国家、さらに小さいながら独立した多様な国々に分かれ、王あるいは高官として才能を揮う機会が、少なくとも統治者の数に見合うだけ増大した」ために、専制権力の腐敗から免れている。第三に、軍事技術の進歩によって、とりわけ「大砲と築城とが今日ではタタール人の騎兵に対して難攻不落の障壁となっており、ヨーロッパは将来いかなる蛮族の侵入も心配する必要はない。」

以上のように検討を続けたあと、ギボンは次のように結論する。「人間がその肉体と精神両面の能力を発展させ開発して行った進歩の道程は、必ずしも平坦一様ではなく、初めのうちは極度に遅々とし、やがて次第にその速度を二倍、三倍に増して行った。苦心惨憺

しての上昇が数代続いた後に一瞬にして急激な下降が襲ったこともあれば、地球上の各地域が光明と暗黒との変転に見舞われたこともある。とはいえ過去四千年の経験はわれらの希望を拡大させ、われらの危惧を縮小させずにはおかない。われら人類が完全を目指しての前進において、どれだけの高きまでを望み得るかは確言できないとしても、自然界の表面に大変化の起こらぬ限り、もはや人類が本来の野蛮状態に逆戻りすることはありえないとあえて決めてかかってでも大丈夫であろう。」「われわれは、人類の真の財富と幸福と知識、そしてことによると道徳をも、世界のすべての時代が増大させてきたし、今後も増大させて行くだろうという嬉しい結論を受け入れてよからうと思われる。」古代ローマ文明に対する尊崇とその没落に対するロマン主義的感興と、同時代のヨーロッパ文明社会の未来に対する確信とが、ギボンの中で同居していたのである。

三 一八世紀とギボンの野蛮認識

前節で述べたように、一八世紀の人間の博物学の中で、「野蛮」の観念は、次第に明確な形をとっていき、一八世紀の後半には、野蛮から文明にいたる階梯の底辺に位置づけられるようになる。たとえば『百科全書』の中で、野蛮人 *savages* は、「法もなく、統治もなく、宗教もなく、いかなる定まった住居をも持たない未開人 *barbaric people*」であるとされた。さらに野蛮人 *savages* と未開人 *barbarians* との間に区別が置かれ、前者は、政治的統合を示さ

ないのに対して、後者は、しばしば統合されている。自然的自由は、野蛮人の中にのみ見られ、自然と風土がほとんどそのみで彼らを支配している。狩猟あるいは牧畜を生活の糧としているので、彼らは宗教的規律に服することもなく、宗教を、生活を組織する基礎とすることもないと述べた。一七七一年の『トレヴーの辞書』になると、野蛮人と未開人の区別は、より明確に提示されるようになった^③。

野蛮人と未開人の間に区別を置く考えは、『法の精神』におけるモンテスキューの言葉から生まれたものであったが、スコットランド啓蒙思想においては、財産の所有の有無が注目された。こうして、世紀後半には、「野蛮・未開・文明」と進歩発展していく三段階の歴史進歩の図式が生み出された。たとえばロバートソンは、『アメリカ史』の中で、より物質的な判断基準を導入し、「文字も金属も家畜もない野蛮人」、「金属と家畜を持つ未開人」、「工業と学芸を持つ文明国民」という三分を唱えた。フランスではより哲学的政治的な判断基準が好まれた。野蛮人は自然の秩序に属して、定まった住居を持たず、宗教も法も習慣も持たない。未開人は歴史世界に属しており、民族を形成し国家を樹立しているが、定まった法の保護を享受しておらず、知識と習慣は粗野な状態にとどまる^④。

このように一八世紀後半において、野蛮人と未開人に何らかの判断基準から区別を置き、野蛮、未開、文明の三段階の発展図式を前提とすることが広く行われたが、ギボンの場合は、明らかにこのような区別は認められず、『衰亡史』における区別は、ただ野蛮と文

明の間にのみ引かれている。つまり『衰亡史』は、文明社会たるローマと文明社会の外部にいた野蛮な民族との間のドラマとして描かれていた。野蛮人 *savage* と未開人 *barbarian* の間に区別を置かなかったことは、ギボンが基本的に古典古代の区分法であるギリシアと異民族 *barbarian*、ローマと異民族という二分法を採用したこと^⑤を示している。しかしギボンは同時に、外部の異民族を「野蛮人」*savage* と呼んでいるので、この言葉の一八世紀的意味合いを意識しながら、文明人と異民族の文化的落差を特に強調したと考えられる。ともかく、ギボンの姿勢は基本的に哲学的であるよりも歴史的であって、啓蒙思想家の思弁の中にしか存在しない「自然人」*natural man* や「高貴な野蛮人」*noble savage* は、彼にとって縁遠い仮構物に他ならなかった^⑥。

しかしながら、『衰亡史』第九章において展開されるゲルマン民族の分析の中には、スコットランド啓蒙思想を特徴づける四段階理論の影響がかなり明瞭に読み取ることができる。ここでギボンは、タキトゥスに依拠しながら、ゲルマン民族が都市も文字も芸術も貨幣制度も有していない野蛮状態にあることを指摘し、民会制度と戦士の独立に象徴される「ゲルマン人の自由」*Germanic freedoms* についても、大した共感を表していない。「近代国家は堅固で永続性を持つ社会で、法と政府によって結びつけられ、芸術と農業によって生まれながらの土地に結ばれている。ゲルマン部族は、自発的で変動のある戦士の結合体であり、その戦士のほとんどは野蛮人

savage からなっていた。^②」この引用文からもわかるように、ギボンはゲルマン人の固有の尊厳を認めず、ほぼ野蛮人からなる集団と捉えていた。

『衰亡史』の第二十六章では、蛮族大移動の潜在因を明らかにする目的で、スキタイ人及びタタール人の遊牧生活が、食物、住居、肉体的鍛練という重要な三項目にわたって仔細に考察されている。そしてそこにおいて、遊牧民は文明諸国民と次のように対置される。「そもそも、地球上の文明諸国民を特徴づける資格というべきは、いかに彼らが理性を用いるか、あるいは悪用するかのいかんにかかっているものであり、その一事がヨーロッパ人またはシナ人の習俗や思考を、各民族各様に、またいわば人為的に作り上げているのである。ところが他方、本能の作用というものは理性の作用よりもはるかに確実かつ単純であるので、哲学者の思索を確実につかむことと比べると、四足獣の食欲を確実につかむことの方が格段にたやすい。それと同じく、野蛮諸部族 *savage tribes* の場合でも、彼らは動物の状態により近いので、同部族内でも部族相互間でも極めて強い類似性を保持している。彼らの習俗の画一的な安定性は、彼らの諸能力が未発達であることの当然の結果なのである。同じ状況に置かれているので、彼らの欲求、欲望、快楽は変わることはない。より改善された社会状態においては、精神的諸原因 *moral causes* によって押し止められたり克服されている食物や風土の影響が、蛮族 *Barbarians* の民族性を形成し維持する上で、最も強力に作用している。」

四 共和政、徳、商業

以上のようなギボンの文明と野蛮に対する見解を一八世紀の政治思想、社会思想との関わりから読み解こうとしたのが、ポーコックである。ポーコックはギボンの学問的背景が一時代前の古代派の伝統や碑文アカデミーの成果にあるとはいえ、これ以外に『衰亡史』の中には「歴史社会学」*historical sociology* ある、「歴史哲学」*philosophy of history* と呼ぶより近代的な立場が存在すると指摘する。この歴史社会学は、「彼が批判的にせよ大いに尊敬したモンテスキューよりも、ビュフォンとマブリに基づくものであり、また、彼が非難することになったヴォルテールよりも、ヒュームとスミスに基づくもの」^③であった。この歴史社会学はまた、一種のイデオロギーであり、後期啓蒙思想の世界観についての明瞭なイメージを提示している。^④

啓蒙期全体を通じて、モンテスキューの政体論の影響と拘束は強く、その点についてはギボンも例外ではない。とりわけ「徳は共和政体の原理である」というモンテスキューの主張の持つ重みはかなりのものであった。有徳であるために、人は共和国の市民でなくてはならない。財産は、共和国の市民に独立を与え、都市の大義に基づいて武器をとる能力を与える。武器を持つ有産者からなる共同体は、自ら作った法律に従う市民の共同体でなくてはならない。この共同体は、神々をあがめる迷信的多数者と都市そのものをあがめる

ことの重要性を理解している哲学的少数者から出来上っているが、その場合、そこに武器を持つことと法律に従うことにおいて平等が保たれている限り、市民の徳は保たれる。哲学者は元老院議員である必要があるが、彼は一市民であることに完全に満足している。^⑧

このような見方に立つ時、共和政は理想の政体でありながら、歴史的には移ろい易く、ひ弱なものとなる。共和国はたやすく腐敗し、それが依拠している平等は、政治的、道德的、経済的变化によって破壊されやすい。都合の悪いことに、こうした諸変化は偶然ではなく、共和国の徳がなせる必然であった。つまり有徳なるがゆえに敵を打ち負かし、敵を破るがゆえに帝国を形成し、帝国になるがゆえに、少数の人々に権力を獲得する機会を与える。その権力は、平等とは相容れず、法律によって制御できないものとなった。それゆえ、共和国は、「成功と過大によつて」by success and excess 破壊されたのである。^⑨

以上のような共和政理解は、古代ローマに関して、ポリュビオス以来サルステイウス、タキトゥスを経て、マキャヴェリ、モンテスキューへと受け継がれていったが、ギボンの『衰亡史』においてもモンテスキューの主張を受けて次のように再演されている。「一都市が勃興して一つの帝国にまで膨れ上がることは、特別な偉観として哲学者の考察に値するかも知れない。しかしローマの衰退は、その並はずれた偉大さのもたらした自然で不可避の結果であった。繁栄が腐敗の原理をはびこらせ、破滅の諸原因は征服範囲の広がり

伴って倍加していった。時の経過と偶発事の続出とが人為的な支えを取り除いてしまふや否や、途方もない建造物は自らの重みに耐えかねた。その破滅の足取りは簡単明瞭である。われわれは、なぜローマ帝国が減じたかを問うことよりも、むしろ帝国がかくも長きにわたり生き長らえたことに驚くべきである。」^⑩

このように、ギボンの『衰亡史』には、共和政と徳と帝国に関する伝統的観念が色濃く残っており、ローマ帝国の衰亡を、何よりもまずローマの拡大の必然的結果と見なす見解を自明の前提としていた。しかしながら、すでに見たように、「西方におけるローマ帝国滅亡に関する一般的考察」に盛られた内容は、こうした帝国形成から生じる必然的衰亡論で尽くし切れるものではなく、むしろ帝国内部におけるキリスト教の浸透によって生じた不和对立と、そして何よりも野蛮諸部族の侵入に求められていた。それゆえポーコックは、ローマ共和政と元首政の腐敗という伝統的見解からはギボンの立場を説明し切れないと考える。確かに、ギボンは、帝国の膨脹、軍隊の職業化、元首政という制度、徳の腐敗については、従来の見解を受け入れてはいるが、富が徳の喪失の原因であるとは考えていないと指摘する。ギボンによれば、古代社会の防衛力を腐蝕させたのは、奢侈そのものではなく、専政であった。^⑪

そこで経済的繁栄と徳の関係について、ギボンは一種の近代的見解に立ったとポーコックは推論する。つまり、経済的には原始的な状態にあったために、古代の徳は戦闘的なものであった。これに対

して近代の生産的な市場経済はこの意味での徳を全く必要としないし、このような徳の消失によって腐敗することはない。ポーコックによれば、デフォール、モンテスキュー、ヒューム、スミスらと並んでギボンもまた、こうした近代の見解に達した。彼らにとって、一八世紀ヨーロッパの商業と文化の興隆は、興隆によって古代の徳の喪失をもたらすだけの値打ちがあった。商業と文化の興隆は、生産と消費、交換、相互依存、共感についての人間の能力を格段に高め、こうした能力を基礎として、自己への愛が同朋たる社会的存在への愛へと広がっていくことを示すような新しい倫理体系の確立をもたらした。^④このような近代の見解に立つがゆえに、ギボンは「一般的考察」の結論として、すでに述べたようなヨーロッパ近代文明の将来に対する自信と樂觀的見通しを提示することができたのである。

そこで、「一般的考察」においては、ローマの帝政後期が、もはや徳を新しく置き換えたり再生したりする能力を失ってしまった軍事専政であるのに対して、近代ヨーロッパは、さまざまな国家から構成される一つの大きな共和国で、お互いの軍事的徳を保ち、お互いの統治の形態を矯正し、交易と競争とによって、お互いの経済を強化していることに強調点が置かれている。近代ヨーロッパ社会のような平和で進歩的な社会では、軍事的、政治的徳は、穏和な水準に保たれ、根本的な重要性を持つことはない。ギボンの言葉に従えば、近代ヨーロッパでは、君主国の「暴政の悪は、恐怖と恥の相互作用によって抑制される。共和国は秩序と安定を獲得してきた。君

主政は自由の原理を受け入れるか、さもなければ少なくとも節度の原理を受け入れた。最も欠陥の多い政治体制にも、多少の名誉と正義の感覚が、時代の一般的生活様式によって植えつけられている。平時には、極めて多くの活発なライヴァルとの競争によって、知識と工業の進歩が加速される。戦時には、ヨーロッパ各国の軍隊が、適度にして決定的事態に至らない程度の対立によって訓練される。」^⑤

さて、徳に関するギボンの認識の近代的側面を以上のように分析した後で、ポーコックは「一般的考察」に込められたギボンの立論のもう一つの特徴の考察へと進んでいく。先に紹介したように、

「一般的考察」は、西ローマ帝国の没落とそしておそらくは近代ヨーロッパの没落の可能性に関して、内部からの腐敗というよりも、外部からの野蛮人の襲撃の可能性という観点から議論を進めていた。そして近代ヨーロッパは、外部からの新たな遊牧民の攻撃に十分に對抗できるように、没落の危険性が極めて小さいと結論していたのである。遊牧民の役割に対する過度なまでの強調は、四段階理論を踏まえたギボンの「野蛮の社会学」によって説明できるとポーコックは考える。

『衰亡史』の第九章には、ゲルマン人は貨幣と文字を持たない野蛮人であるという指摘がある。貨幣と文字について、ギボンは明らかに、これらが人間の精神を育む事物を増加させ保持する交換手段と考え、その重要性を注目している。そうしてゲルマン人が野蛮人であるのは、彼らの社会条件が前農業的 preagricultural であるか

らで、貨幣と文字がないことは、野蛮で前農業的な社会の特徴として示されている。ゲルマン人は働かず、物を生産することもない。

その結果として、物事をじっくり考えることは全くできず、意識的行動を起こすこともほとんどできない。戦争こそが彼らの行う唯一の活動であった。確かにギボンはゲルマン人の名誉と自由に触れてはいるが、彼にとって徳とは市民の社会に属するもので、野蛮人は彼らが社会を形成して、生産の能力と共同労働を身につけた時のみ、徳に目覚めることができる^⑮。

『衰亡史』の第二章は、野蛮状態についてのギボンの見解が、「遊牧諸民族の生活様式」と題して集中して展開される一章である。ポーコックは、ここに提示されたギボンの見解を、四段階理論の適用という観点から、以下のように読み解いていく^⑯。第二章においてはすべての牧畜社会は本質的によく似ていて、その社会における人間性は、動物の状態に近いと述べられている。というのは、牧畜民は労働することはなく、ただ草を食む家畜の群を従えるだけなので、文化的な個性や多様性を発達させることはない。彼らの主要な特徴は、戦時において一斉に移動し残虐さを示すことにある^⑰。ギボンのこのような野蛮人に対する見方は、かなり大雑把で画一的であると言える。スキタイ人やタタール人が、フンやゲルマン人と大枠で同一のカテゴリーの中で処理されているからである。彼らは動物に近く、強固な一律性を持つ習俗を保ち、古代から近代にいたるまでたいした変化、発展を見せず、移動と征服という民族性を発揮し続け

た。そしてアジアから東欧にまで広がる広大な地域に展開する北方遊牧民は、中国とローマという二つの文明世界を、脅かし続けた^⑱。ここにはより粗野な姿ではあるが、ゲルマン人に与えられた性格づけのくり返しが見られる。

ギボンにおいては、すでに確認したように、文明と野蛮の二分法が決定的な重みを持っていた。スミスの見解では、狩猟民、牧畜民、農耕民、商業民と四段階に区別されていた社会の発展は、ある意味でギボンの場合、不分明な区別として存在している。たとえば、スミスの場合、牧畜民は狩猟民とは異なり、私有、役割の特化、階級差、政治的支配が最初に姿を現す段階と捉えられているが、ギボンの場合には、両者の間の差は、程度の差としてしか意識されていないように見える。そのため、ゲルマン人は、それ自体では積極的価値を持つことのない牧畜民とされ、彼らが明確に社会を形成するのは、ローマ帝国に侵入してからとされる。しかし、その時になっても、彼の述べるところでは、ゴートとフランクは狩猟民、牧畜民、戦士として一貫し、征服された農業社会を搾取する存在として描かれている。メロヴィング朝に姿を現す最初の封建領主たちについても、本質的に狩猟民であり、狩りのために耕地を森林に変えたと述べている^⑲。

このように解釈することによって、ギボンは、ゴート人の土地の均分に基づく徳という神話を破壊した。この神話では、封建社会がしばしば戦士である自由保有農の原初的共和政と等置されたが、ギ

ボンはあっさりとした見方を否定したのである。^⑩ギボンの立場は、明らかに明確な近代主義であり、そこにおいて野蛮な遊牧社会と、文明的な都市社会が大きく対照的に描かれている。そして農業は、製造業の基礎であり、製造業の前提条件としてのみ出現するので、許容されることになる。ここには、農耕社会から商業社会への進歩発展を主張する四段階理論を踏まえた見方が読み取れる。古代派によって唱えられ、この世紀の間広く流行した、商業社会を農業社会からの墮落とする見方は、窺うことができない。しかしギボンが「一般的考察」において農業に与えている役割は、決して大きくはないと考えた方がよい。農業は、文明が野蛮人を根絶するための手段である。また農業は文明が決定的破局にいたることを防止する盾である。^⑪そして農業のこの二つの役割によって、近代ヨーロッパはかつての西ローマ帝国のように没落の時を迎えることがないとギボンは断言するのである。

五 おわりに

以上述べてきたように、ギボンと彼の『衰亡史』における「文明」と「野蛮」の位置は、一八世紀啓蒙思想における世界認識と歴史認識において、スコットランド啓蒙思想に見られるそれと、基本的には一致していたと言っているであろう。ギボンの『衰亡史』の範圍と課題という限定の下では、スコットランド啓蒙思想がほぼ同じ時期に確立していた四段階理論の明確な表現を、その中に見つけ

ることはできないし、また野蛮人と未開人の区別もそこでは設けられていない。しかしながら、一方でギボンは、生計の種類に注目しながらローマとゲルマン（およびフンに代表される遊牧民）を文明と野蛮の二分法で捉え、さらに商業に基づく近代ヨーロッパ世界を古代文明の上位に位置づけていた。そこではこの世紀の前半に流行した「原始の徳」や「高貴な野蛮人」の称揚の跡は拭い去られ、農業的価値さえも、限定的役割を与えられるに過ぎない。

しかし、このように捉えた場合、一つの問題が残る。それはフェレがくり返し指摘するギボンの歴史的感覚あるいは歴史家としての姿勢に関わる。評価したり位置づけたり理論化したりする以前に、ギボンは事実をなるべくあった通りに物語ろうとする基本的態度を保持し続けた。その態度と歴史的事実の重みに対する立場は一九世紀のロマン主義の歴史理解との親和性を強く持っているとの指摘である。このようなギボン理解を極端に押し進めるならば、ポーコックのいう「近代ヨーロッパ社会の優位」や「野蛮状況の社会学」は、ギボン本来の態度からの一種の逸脱として見なければならぬであろう。これに対してポーコックは、ギボンの個人的感懐や意識をはなれて、あくまで『衰亡史』を一八世紀の後期啓蒙の世界観の一つの代表として読み解こうとする。なぜなら、『衰亡史』の舞台は遠い過去にあっても、その考察を支えるギボンの視点は、あくまで一八世紀の「歴史社会学」や「政治思想」との密接な関連の下に形成されてきたからである。文明、野蛮、共和政、徳、商業などこうい

った基本的な言葉の内、ギボンが当時の思想動向と関わりなしに使いえたものは何一つない。それゆえポーコックは、ギボンの『衰亡史』をロマン主義的歴史感覚の観点からではなく、よりイデオロギー的に分析すべきだと主張しているのである。^⑤

ギボンの歴史的感覺の評価と役割については、『衰亡史』全体の検討に加えて、彼の自伝的検討がまず必要となる。また、今回は触れることのなかったギボンの史料操作の検討もこの問題に付随してなされねばならない。他方、ポーコックの指摘をより詳細に確認するためには、同時代の思想家との相互比較が課題として出てくるはずである。これらのことを確認した上で、本稿はポーコックの分析の基本的な正しさを確認しておきたい。あらゆる人間はその時代の子であるのだから。

註

① ギボンと『衰亡史』の名声については、くり返すまでもないが、近年刊行されたロイ・ポーターの著作においても、ギボンが一七九四年に亡くなる時までにロバートソンとヒュームに並ぶ三大史家の一人に数え上げられていたこと、つまり他の二人はスコットランド人であるので、最も偉大なイングランド人歴史家としての名声が確立しており、他の歴史作品の名前をあげることができない人でも『衰亡史』の名だけは知っていたことなど興味深いエピソードを紹介している。Roy Porter, *Edward Gibbon: Making History* (Wendenfeld and Nicolson, 1988), pp. 1—3.

② 『衰亡史』の読まれ方について、一章をさいて詳細に述べたクラディックによれば、一九世紀中頃には、『学生のためのギボン』*Student's Gibbon*

エドワード・ギボンにおける文明と野蠻

と題する要約テキスト版が作られ、オクスフォードを中心にイギリスとアメリカで五〇年以上もの間、数え切れないぐらい版を重ねて読まれたという。こうした影響もあってか、トレヴァー＝ローパーは、今日でもギボンの歴史研究は、記念碑ではなく模範であると考えている。Patricia B. Craddock, *Edward Gibbon: Luminous Historian 1772—1794* (Johns Hopkins U. P., 1989), p. 359; H. R. Trevor-Roper, "Gibbon: Greatest of Historians," *Journal of the History of Ideas* 1 (Winter 1968), pp. 109—16.

③ Patricia B. Craddock, *Young Edward Gibbon* (Johns Hopkins U. P., 1982).

④ Craddock, *Edward Gibbon*, ix-xiii.

⑤ *Ibid.*, pp. 409—15.

⑥ 詳細で個人の性格、心理、経験に分け入っていく伝記的研究によって得るところは少なくないが、心理分析的伝記は、常に度を越す結論にいたる危険性を有していると言える。その意味で、伝記的研究に対するポーターの警告は当をえたものであろう。Porter, *Edward Gibbon*, pp. 9—13.

⑦ Arnaldo Momigliano, "Gibbon's Contribution to Historical Method," *Historia* 2, 1954, pp. 450—63. Reprinted in Momigliano, *Studies in Historiography* (Wendenfeld and Nicolson, 1966), pp. 40—55.

⑧ 古代派—近代派論争については、A. O. オールドリッジ (川島昭夫訳) 『新旧論争』『進歩とユートピア』平凡社、一九八七年、一三六—一八九頁が、まとまった像を与えてくれている。この論争のイギリスでの展開とギボンとの関わりあについては、次にあげる文献が注目し価値する。J. G. A. Pocock, *The Ancient Constitution and the Feudal Law: A Study of English Historical Thought in the Seventeenth Century* (Cambridge U. P., 1987); Joseph M. Levine, *Humanism and History: Origins of Modern English Historiography* (Cornell

U. P., 1987).

- ⑨ Ronald L. Meek, *Social Science and the Ignoble Savage* (Cambridge U. P., 1976). 拙稿「一八世紀後半における空間の消滅」樋口謹一編『空間の世紀』筑摩書房、一九八八年、七七一—〇四頁。

- ⑩ J. G. A. Pocock, "Gibbon's *Decline and Fall* and the World View of the Late Enlightenment," in his *Virtue, Commerce, and History* (Cambridge U. P., 1985), pp. 91—102.

- ⑪ Momigliano, "Gibbon's Contribution," p. 41.

- ⑫ サイドがギボンについて触れるのは、わずか五ヶ所だけで、そこでサイドは、ギボンがオリエントをイスラム的オリエントを指すもの、限定的に理解し、ローマ帝国衰亡の教訓をイスラムの興隆の中に読みとったと考える。ギボンは、オリエンタリズムの近代的構造に至る道を準備した一八世紀の四つの要素——拡大、歴史的対決、共感、分類——の一つである歴史的対決に関わる人物として描かれている。しかしサイドのようにギボンの『衰亡史』をヨーロッパとイスラムとの歴史的対決の側面からのみ取り上げること、不十分あるいは不正確であらう。エドワード・W・サイード（今沢紀子訳）『オリエンタリズム』、平凡社、一九八六年、七五、一二〇—一二四頁。なおサイドのオリエンタリズムの図式に対する一つの批判として、一八世紀末の哲学者ヴォルネーのオリエント観を詳細に検討した次の論考がある。服部春彦「ヴォルネーのオリエント観——一八世紀ヨーロッパにおける外部世界認識の一事例——」樋口編『空間の世紀』、一〇五—一二五頁。

- ⑬ 樋口謹一「序論——なぜ空間の世紀か——」樋口編『空間の世紀』、四—五頁。

- ⑭ P. J. Marshall and Glyndwr Williams, *The Great Map of Mankind: Perceptions of New Worlds in the Age of Enlightenment* (Harvard U. P., 1982), pp. 90—91. 邦訳（大久保桂子訳）『野蠻の博物誌——一八世紀イギリスがみた世界——』、平凡社、一九八九年、一

三九頁。

- ⑮ 西川祐子「地球と人類の発見——ビュファンの『自然誌』——」樋口編『空間の世紀』、二二—五二頁。

- ⑯ Marshall and Williams, *The Great Map of Mankind*, p. 92. 『野蠻の博物誌』、一四—一四二頁。

- ⑰ *Ibid.*, pp. 92—93. 同、一四—一四四頁。

- ⑱ Meek, *Social Science and the Ignoble Savage*, chap. 5.

- ⑲ 拙稿「一八世紀後半における空間の消滅」、一〇—一四。

- ⑳ Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by R. H. Campbell, A. S. Skinner and W. B. Todd, 2 vols., 1976, pp. 693—94. ヴェースマスは「農耕社会の

具体例として、古代ギリシアのポリス、初期王政期および共和政初期のローマ、ヨーロッパの中世封建社会をあげている。共和政後期のローマと帝政ローマについての言及はないが、商業社会の具体例が近代ヨーロッパ文明諸国民にのみ求められていることを考えると、ローマ帝国に対する評価は、基本的に農耕社会の枠内に止められていると考えられる。

- ㉑ François Furet, "Civilization and Barbarism in Gibbon's History," in his *In the Workshop of History*, translated by Jonathan Mandelbaum (The Univ. of Chicago P., 1984), p. 141. なおこの論文は次にあげる論文に手を入れてこの論文集に収録されたものである。Furet, "Civilization and Barbarism in Gibbon's History," *Daedalus* (Summer 1976), pp. 209—16.

- ㉒ Edward Gibbon, *The Decline and Fall of the Roman Empire*, Great Books of the Western World 40, 41 (The Univ. of Chicago P., 1952), vol. 1, chap. 3, p. 32. 以下『衰亡史』からの引用はすべて DF, III (1, p. 32) のちびく省略で、ローマ数字や章を括弧内、Great Books 二巻本の巻号と頁数を示すことにする。訳文については次の邦訳を参考にしながら、適宜手を加えた。村山勇三訳『ローマ

『帝国衰亡史』全一〇巻、岩波書店、一九五一年。中野好夫、朱牟田夏男、中野好之助『ローマ帝国衰亡史』一巻一七巻、筑摩書房、一九七六—九〇年。

②③ DF, XXXVIII, "General Observations on the Fall of the Roman Empire in the West" (1, pp. 630—34).

②④ Furet, "Civilization and Barbarism," p. 141.

②⑤ *Ibid.*, pp. 143—44. ノーマン・フレイのギボンが哲学的な理論化を避けて、歴史家としての態度を保持し続けたという見方をとるのは、この文の趣意である。J. W. Burrow, *Gibbon* (Oxford U. P., 1985), pp. 24—26; Porter, *Edward Gibbon*, pp. 161—63; Momigliano, "Gibbon's Contribution," pp. 42—44, p. 51.

②⑥ DF, XXXVIII, "General Observations" (1, p. 632).

②⑦ *Ibid.*, pp. 632—33.

②⑧ *Ibid.*, p. 633, 634.

②⑨ Furet, "Civilization and Barbarism," p. 145.

②⑩ *Ibid.*, p. 146. 歴史家としての議論としてのこの文獻を参照。Meek, *Social Science and the Ignoble Savage*, chap. 5, 6; Marshall and Williams, *The Great Map of Mankind*, chap. 7; Furet, "From Savage Man to Historical Man: The American Experience in Eighteenth-Century French Culture," in his *In the Workshop of History*, pp. 153—66.

②⑪ Furet, "Civilization and Barbarism," pp. 146—48.

②⑫ DF, IX (1, p. 96).

②⑬ DF, XXVI (1, pp. 409—10). この引用文の中でギボンはかなり明確に、文明化された民族においては、精神的原因がその民族の性格を決定する上で重要な役割を持つが、野蛮人の場合は自然的原因である食物や風土が決定的原因となっていることを指摘している。また、この主張は、風土決定論を唱えたと誤解されやすいモンテスキエの『法の精

神』に表れた見解を正しく受けついでいると言えよう。引用文に登場する「食物」「風土」「精神的諸原因」という言葉からしてもモンテスキエの影響を読み取ることはたやすい。拙稿「一八世紀後半における空間の消滅」八二—八八頁。

②⑭ Pocock, "Gibbon's *Decline and Fall*," p. 144.

②⑮ *Ibid.*, pp. 143—44.

②⑯ *Ibid.*, p. 145.

②⑰ *Ibid.*, p. 146.

②⑱ DF, XXXVIII, "General Observations" (1, p. 631).

②⑲ *Ibid.*, pp. 631—34.

②⑳ Pocock, "Gibbon's *Decline and Fall*," p. 146. ギボンはローマ帝国における奢侈について、フニンブス・マルケリヌスの言葉を引用しながら、元院議員たちの腐敗を語っている。彼らは「軍務と政務を遠ざけそれによって生じた余暇を、私的なビジネスと娯楽にあてた。ローマでは商業が蔑視されていたので、彼らは高利貸しによって巨富を築き、これみよがしの浪費に励んだと述べる。一方、平民は、労働を嫌悪して同じく借金と浪費にひたり、農民は、軍務に就いている間に耕作の放棄を余儀なくされ、やがて土地を失った。よって、ローマの平民と比較してギボンの次のように述べられているのは、彼の商工業についての見方を知らずに示唆的である。『今日、商業と製造業の中心地である人口の多くの諸都市では、中産階級の住民 the middle ranks of inhabitants が、手先の器用さと勤勉から自らの生計を得ている。彼らはそうして、最も多産で最も有用な、そしてかかる意味で最も尊敬を受けている社会の構成部分となっている。』DF, XXXI (1, p. 499, 501).

②㉑ Pocock, "Gibbon's *Decline and Fall*," pp. 147—48.

②㉒ DF, XXXVIII, "General Observations" (1, p. 633).

②㉓ DF, IX (1, pp. 88, 89—90, 96).

②㉔ Pocock, "Gibbon's *Decline and Fall*," pp. 150—51. なお遊牧民に

のみ注目して分析した論考として以下のものがある。Pocock, “Gibbon and the Sheperds : The Stages of Society in the *Decline and Fall*,” *History of European Ideas* 2 (1981), pp.193—202.

④⑤ DF, XXVI (1, p.411).

④⑥ DF, XXVI (1, p.413).

④⑦ 拙稿「一八世紀後半における空間の消滅」九五—九九頁。

④⑧ DF, XXXVIII (1, pp.619—20).

④⑨ Pocock, “Gibbon’s *Decline and Fall*,” p.151.

④⑩ DF, XXXVIII, “General Observations” (1, pp.632—33).

④⑪ ポーロックのこのような立場は、彼の数ある作品を一貫する根本的態度であるといつてよい。そこで表明されているのは、歴史叙述は、最終的には常に歴史家の生きる当時の社会に対する評価と不可分であり、それゆえ当人の意識の有無に拘らず、イデオロギー的性格を帯びることになるという見方であろう。この点に関しては以下を参照。Pocock, “Modes of Political and Historical Time in Early Eighteenth-Century England,” in his *Virtue, Commerce, and History*, pp.91—102; *Ibid*, Introduction : The State of the Art, pp.1—34.

(追記) 本稿は平成二年度学部共同研究費の助成を受けた研究成果の一部である。